

立教大学 学部別総評

★学部別傾向★

一言で言うと“ない”。以前からあまり学部別の色を問題に出さない大学ではあったが、全学部入試が始まったと同時に、学部学科の急増も相まって、同日試験の学部学科は同問題という形式となり、ほぼ学部別傾向は消滅した。かろうじて、法学部・文学部・社会学部のみはここ数十年固定日ではあるが、どう見ても傾向を読み取ることはできない。

★年度別傾向★

ここ数年間、同年の6日分の入試問題に類似点が出てきている。6カ年データ表を見れば一目瞭然である。問題数が少ないため、この年度別流行は大いなる対策となるだろう。複数学部受験するか、しっかりと同年他学部の問題情報を手に入れることが重要視されてくるだろう。3割程度は出題単元が毎年がぶっている。

☆配点表☆

法学部・異文化コミュ	英200	国200	地歴100	★	
経済学部	英150	国150	地歴100	★	
経営学部	英150	国100	地歴100		
文学部	英200	国200	地歴100	★	※史学科のみ 地歴200
社会学部	英150	国100	地歴100		
観光学部	英200	国200	地歴100	★	
コミュニティ福祉学部	英200	国200	地歴100	★	
現代心理学部	英150	国150	地歴100	★	

※全学部の配点は個別学部の各配点と同じ ★…世界史軽視

★全体的に★

世界史軽視大学の最右翼と位置付けている。大問が2問となった2006年から問題も易化したため、正直世界史で大きく差を広げるのは難しくなった。差が付くなら、用語レベルの正誤1～2割、文化・戦後史がやや難となるので注目したい。配点から考えても、社会学部・経営学部のみがかろうじて国語と同配点、それ以外は英国重視は否めない事実である。世界史得意者は勉強時間を

誤ると致命傷になるので注意したい。

全部で毎年6種類の問題があると思ってよい。多少の傾向はあるが、正直当てにはならず、くじ引きでどの問題を引くかぐらいのつもりで臨まねばいけない。しかし、入試問題全体にはそれなりに傾向は強い。次の10点は頭に入れて大学対策を試みよう。ただ、第一志望にしている受験生はあまり時間を世界史に割かないように！

- ①中国史が出題される時はその周辺の民族や国家（北方民族・東南アジア・台湾など）に注意を払う。地図学習が有効的。東南アジア関連史は毎年出題。
- ②アメリカ・イギリス史の頻度が高い。アメリカは独立から戦後史まで、イギリスはノルマン時代～帝国主義活動まで。
- ③アジア：ヨーロッパ＝1：1。前近代イスラーム関連史は隔年で大問1問程度。
- ④文化史の頻度が高い。大問になくとも必ず小問で登場する。その中でもルネサンス～19世紀の文化（哲学・思想・絵画・音楽・文学・科学技術など）は狙われやすい。
- ⑤戦後史の出題は隔年的に増減している。テーマ史的な出題の最後の部分で戦後史になるので、コンスタントに8～10%は有る。多い時には15%なので注目したい！
- ⑥以前のへなちょこ？テーマ史（万国博覧会史・オリンピック史・辺境各国史）が復活のきざし。基本は通史をタテに見ればよいが、特殊テーマ史の対策が大切になるだろう。
- ⑦短文論述（30字程度）は立教世界史の真骨頂。しかし、近年その出題は明らかに減った。出題されても、用語の説明か、流れを書かせる程度。
- ⑧正誤問題はオーソドックスだが、全体の3割を占めるので無視はできない。併願大学の正誤問題やセンター対策の問題集で演習は必要だ！
- ⑨年代は確実に出題される。戦争・戦い・法律・制度・乱・革命・王朝の変わり目などはコツコツと暗記したい。全30～40問中3～4問、つまり1割。出来事の並べかえが多い！
- ⑩テーマはあくまでもリード文作りのため。実際は幅広い小問から構成されている。あまり絞らずに広く浅くをこころがけて覚えよう！